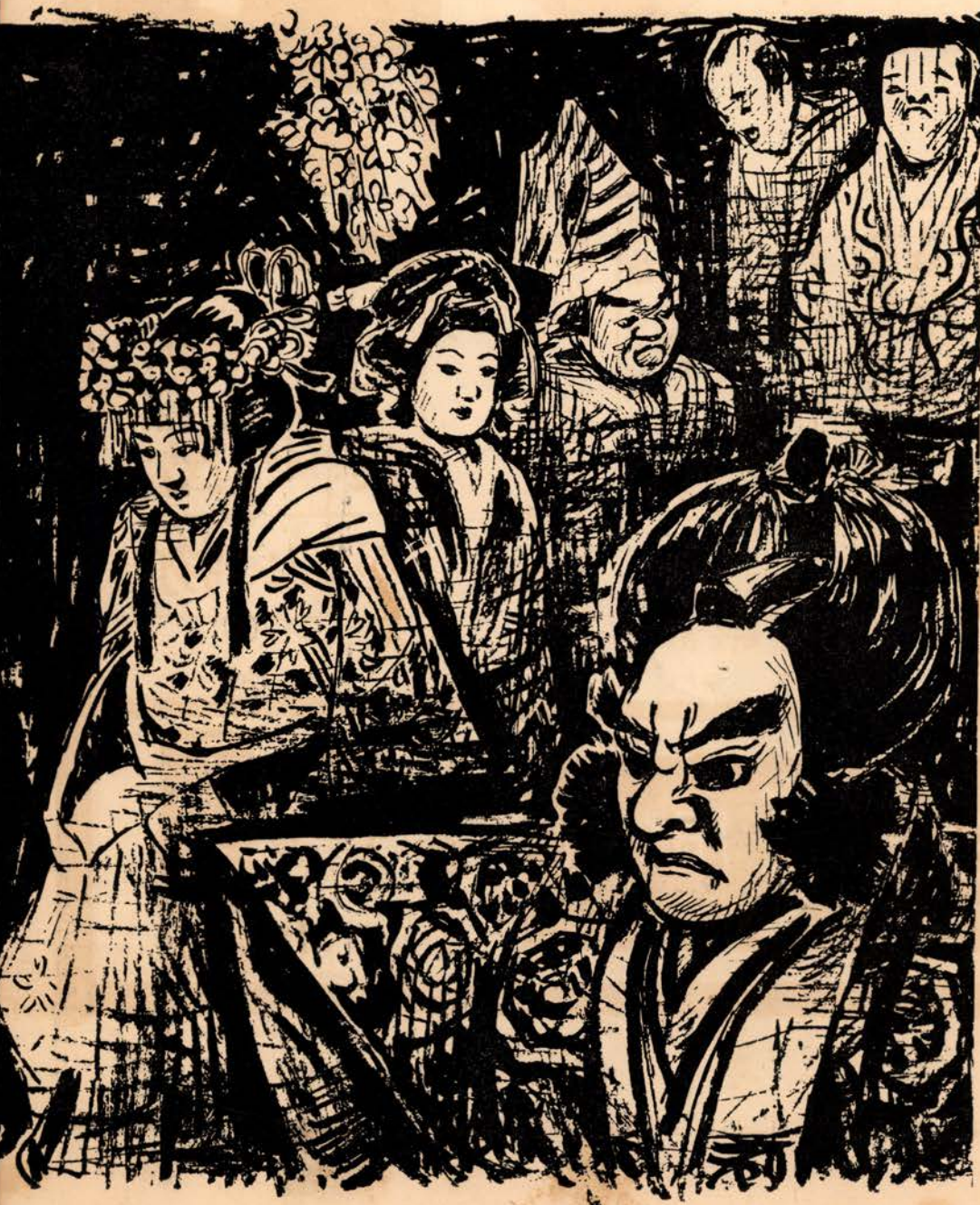


川柳雅証

(行發日五十回一月毎)號四第卷五十第 行發日五十月四年三十和昭 可認物便郵種三第日三月三年三十正大

輯編★郎路生麻



5 13年

4

號四第 卷五十第
行發日五十月毎

菊正宗



店商納嘉本 株式會社

北料理 白蘭

典雅な日本座敷

土佐堀船町



天然鰻の味

日本料理の粹

竹葉亭



本亭 大阪市瓦町(大手橋西詰)

南店 同 湊町驛前(阪急ビル) 御座敷と食堂

北店 同 堂島濱通(渡邊橋北詰) 御座敷と食堂

梅田阪急百貨店 七階和食堂

戎橋三笠屋 二階和食堂

清酒

白鶴





抄句洞朽不

郎 路 生 麻

さすが銃後
櫻は咲いただけですみ
軍事郵便
これが最後と書いて来る
海の荒鷺
ああそれなのに死にやはった
北みきを君照召
君も征くか
足もごから鳥が立つよに

春の
住之江公園にて



誌 雜 柳 川

號 四 第 卷 五 十 第



川柳雜誌

四月號目次

表紙(文樂人形)……柴谷幸二郎

川柳街雜筆

- 須磨の今昔……………安川久留美……………(四)
- 月評會筆記の思ひ出……………奥村丹路……………(四)
- 自己辯護……………山本葉光……………(四)
- 職人……………濱田久米雄……………(四)
- 川柳味ある人……………長野文庫……………(五)
- 雅號のこころ……………吉田水車……………(五)
- 三等寢臺……………中西おさむ……………(五)
- か……………酒井斗風……………(五)
- 武玉川三篇研究(十六)……………森本秋農屋……………(二)
- 戦線ミ川柳……………蛭子東魚……………(二)
- 川柳で慰問……………不 死 鳥……………(九)
- 北みきを君出征激勵會……………(九)
- 天體川柳の夕……………(一五)
- 志賀市社會部長を悼む……………(一五)

- 不朽洞句抄……………麻生路郎……………(一)
- 戦地より(句)……………月原宵明……………(三)
- 近作柳……………麻生路郎……………(六)
- 川柳……………諸 家……………(三)
- 眼……………小林不浪人選……………(四)
- 集路……………病……………(四)
- 各地柳壇……………姫田夕鐘選……………(四)
- 後……………記……………(表三)
- 川・協の頁……………社關係の人々……………(表三)
- 久良……………古稀祝賀記念品贈呈に就て……………(一四)
- 柳人素描……………(一四)
- (三) 菊川泰平樂君……………(一六)
- 柳界展望……………(二〇)
- 正 本 水 客 君……………(二〇)



武玉川三編研究 (十六)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

忘れたといふ話さへある。

(238) 洗った馬のかはく松かせ

省 二馬を洗つて、松の林に繫いで置くうちに乾く。

秋の屋昔の馬場の周囲の土手には、松樹が多く植えてあつた。

東 魚馬がかはく」と云ふのが、何となしに興がある。私は洗った馬を海岸を曳いて行くやうな場面を想像する。松風がどうも、さう思はせるのである。(昔の馬場の有様などは、少しも知らないのだから誠に止むを得ない。)

(239) 小僧か智恵は飛なから出る

秋の屋酒屋の御用聞などは、そこらを飛ばしながら、機敏に己の義務を果す。

東 魚朗かな句である。三馬の浮世床に出てくる、歳はじけた小僧のやうな氣がする。

省 二この小僧はものになるであらう。大抵は飛歩いて居る中に、皆んな忘れてしまふものだ。中には水溜を飛んだ爲に、御用を

(240) 何所やら匂ふ新御所の雨

秋の屋新しい木の香が、雨天の日に匂ふので、これは晴天の日より、能く匂ふものだ。

東 魚まことに清がくしい心持ちがさる。雨も置き得てゐる。

省 二としや降りでは、匂ひも流し去つてしまふ。穏やかな雨であつて、時々、木の香が鼻に入る。

(241) 關守に時宜をして行傀儡師

秋の屋朝に往き夕に歸る傀儡師は、自然關守とは顔馴染になり、只黙禮をしたのみで、其儘にそこを通るのである。

東 魚毎日關を越へて、往來する傀儡師は、どうも考へにくい。嚴然と構へた關守に對して、飄逸な傀儡師が親しげに時宜をして行つたのに、興味を求めてよくはないか。

省 二通過を許されたので、時宜をして行く。それが傀儡師であるところに、特趣の

興を覺えた作。

(242) 明暮に絲ゆふを汲油うり

省 二主として夕暮に油賣は廻つて來たが、「明暮はいつもと解し、油がギリ／＼して居る様を「絲遊」とみたもの。俳諧職人盡にも、「糸遊を柄杓で汲やあぶら賣」(泉布)と出て居る。幼時附近に油問屋があつて、賣り子が擔いで出て行くのを、毎夕みてゐた。其賣聲は淋しい。「夕暮に秋の聲あり油賣」(嵐角)は實感だ。「京阪は樽の下に宮を用ひず、江戸は桶下に箱あり。」名古屋は京阪式であつたと記憶する。

秋の屋絲遊は面白い形容で、川柳では斯く詠まれない。

東 魚「絲遊を汲む」は技巧的である。事實があつた油の細い滴りが、全く陽炎燃ゆる感があるので、技巧のイヤ味は救はれる。

(243) 家守の耳を鳴つばす蟬

省 二「家守」は家の番人であるが、江戸時代には屋守役と稱して、地主の支配を爲し

つゝ、公用も達してゐたものがある。ツク／＼法師とかミン／＼蟬が、ありつ丈けの聲を上げて、家守の耳をつぶす程なく、家守であつて句趣が湧く。——「こゝにかぢけてゐる昆布巻は、出入の家守から到來、全體まつ小地面の一ヶ所も持てゐるといふ儒者が、どこにあるものか」(一盃綺言。)

秋の屋江戸の市内ではなく、山の手邊の家守であらう。

東 魚「鳴きつばす蟬」に、寧ろ眞實の靜かさを感じる。

(244) 物くるひ關の清水に聞惚れて

省 二關の清水は、近江の清水町に在る清水。諸では「蟬丸」「蟬通」などの中に、「逢坂の關の清水に影見えて、今や引くらん望月の駒」(拾遺集)を引用して居る。句もそれを踏む。物狂は兎角風流に描寫される。

秋の屋「蟬通」よりも「蟬丸」の故事を詠まれた句と思ふ。

東 魚清水の潺湲と流るゝ音を聞いてゐるのが、物狂ひであるところに情趣が深い。美しい女の物狂であるやうにも思はせられる。

(245) 帳を振つて枕見出され

省 二軽い滑稽味がある句だ。空氣枕の如きものでは面白くないが。何々。——蚊帳をふるつて蟬子見出される程、私は衰弱して小さくなつてしまつた。

秋の屋俺の枕がみえないなどゝ、其處らを探した果に、帳を振つて漸く發見した、面白い句である。

東 魚 實際にある事だ。句法がなだらかなでないやうであるが、斯る内容に却つて適しいかも知れぬ。

(245) 本阿彌に星まきゝれて跡しさり

省 二 妙本阿彌(長春)を祖とする刀劍鑑定家。本家分家多々あつたものだ。本阿彌に圖星を指されては、恐縮して退却の外なし。『さつま芋下女本阿彌に罷出。』

秋の屋 低頭平身して、引下る姿が想像される。

東 魚 いや圖星、全く旦那は本阿彌であらツしやる。など、幫間持ちなどは、よくおひやり奉るやつだ。

(247) 乞食寝て居る賣居への門

省 二 賣家、貸家の前で、イヤ銀行の前などで、乞食は涼風にグッスリ寝込んだりして居る。ルンペンの別荘ならん。『忌中の札のあとへ賣居』(武・五)その賣居の門に、乞食がねて居るとは、榮枯盛衰を今更に感ぜしめらる。

秋の屋 賣店の門に乞食の寝姿、悲慘の光景である。

東 魚 寝て居る乞食は極楽とんぼだが、かくなり果てた家こそ、全く哀れである。即ち乞食を點出して、一層の哀れさを描いた句である。

(248) 焚火に鹽の落る腰簀

省 二 鹽の落るは大ゲサ丈けに別趣がある。古人は一寸斯る作風を好むだらしく、『海士の耳から鹽がはろく』(眉・七)。

秋の屋 此れは凝結した鹽でなくて、潮水

の滴るのであらう。

東 魚 乾いたあとの鹽が、落ちるとみてもよろしからうと思ふ。ひどく汗かいたあとの乾いたのさえ、白く鹽がふくから、あながち大げさと云ふ程の事もなからう。

(249) 雨乞に力を添へる尾長鳥

省 二 世界一といふ尾の長さ二丈に及ぶのは、主として土佐産だ。聲は短。雨を呼ぶと云はる。『尾長鳥小町の讀んだ跡を啼』(武・六)『尾長鳥かし三絃にいやがられ』(武・十六)『洗濯にけちをつけたる尾長鳥』(武・十三)等雨乞の加勢をする句多し。

秋の屋 此の句の尾長鳥は、土佐特産の雞では無く有り觸れた尾長鳥だと思ふ。

東 魚 尾長鳥と雨の關係は、「やなぎ樽研究」に拙稿を掲載した事がある。

省 二 尾長鳥を持出せしは私の誤解、取消す。和漢三才圖會に練鵲をナカドリと讀ませて、將雨時群飛、其聲短、其飛也不遠とある。尙ほ詳細知りたいと思ふから、鳥類の専門家に尋ねてみる。悟堂氏の東京近郊の夏鳥の話の中に、「同じ鵲科の鳥でも、尾長は優雅な鳥だ。頭は黒、背面はそっくり青灰色腹面は白だが、この青灰色が如何にも仄かみやびやかだし、同じ色の長い尾をひいてすうい／＼と飛ぶさまも上品である。東京の西郊から埼玉縣へかけては澤山見受けられるが、存外知らない人が多く、杉山や松林などをゲエーイ、エーイと啼き交はしながら、枝移りしてゐる群を見かけて、その大形なものと品のいゝのに驚きの目をあげる人も少くな

い。云々」と。

(250) こせ／＼と何そ言たい念者の氣

省 二 こせ／＼と、こまかい事まで、言ひたがる念者もあらうし、又、言はぬ念者もあらうが、念者としては原句の如きが、パセシテエーデは多いかもしれぬ。

秋の屋 特に言はずともよい事を、何かにつけて注告するのである。

東 魚 二「こせ／＼」とは、好感を持てる場合には用ひない。念者ぶつて何かにつけて云ふのを、他の者が岡やき氣分で、見やつた心持ちであらう。

(251) 二日つゝいて買かつく夢

省 二 寶船の句なのであらうか。二日に見た夢を三日に話す。『咄すにも三日路かゝる不二の夢』、これが「買かつく」なのか。

東 魚 初夢ときまらず、縁起の良い夢を然かも二晩つゞけて同じ夢を見た、こりや愈々本當に良い事がむいてくるぞと、乗り氣になつて、眞劍にかつぐ事を、「買ひかつく」と現はしたものだと思ふ。

秋の屋 富士山に登る夢を、二日続けて見たから、何か吉事があるに相違ない、と自ら御幣を擔ぐといふのであらう。

(252) 通れと聲の尖る關もり

省 二 長唄勸進帳にも、「通れとこそは罵しりぬ」とある。『通れの聲の高い新關』(金砂子)。

東 魚 二「尖る」ところに關守のものゝ敷高ぶり構へた氣分が受取れる。

秋の屋 關守は何時も厳しい顔をして、刺

々しい聲を出すものとされてゐる。

(253) 小さい手からうまい小つゝみ

省 二 娘などが小鼓を打つて居る場面として、案外巧者に、ぬけて好い音を出す「うまい」は説明氣味なしとせず。

東 魚 二「うまい」は今日の單に上手といふ意味以上に、今少しく情趣があるものだと思ふ。

秋の屋 小娘も鼓を打つけれども、美しい若衆の手に打たれるのも、又別の情趣が有ると思ふ。

お顔の剃リッ
放しは皮膚
が泣く！
後必ず――

丹頂チツク本舗



お顔剃り後には皮膚を消毒美化して
清新、發刺と肌をハリきらせる、タ
ウリン主劑唯一の此のローションを

丹頂チツク本舗 金銀香水株式會社 〒・七五



須磨の今昔

安川久留美

Kさんと一しよに須磨寺へ下車したのは朝の十時すぎであつた。兩側に賣店の並ぶ舗装道を眞ッ直ぐ登りつめた所が、源平古戦場で有名な須磨寺。銅貨と替へた線香を奉るほどの抹香臭い信心は無くもがな、Kさんが「おみくじ」をひいたらどうか？と態々小銭まで出してくれたのを否めず、カチャ／＼函をふつて出たのが三十二番の凶、之れはそのまゝ紙入にも納めず路傍に捨てゝしまつた。

○曉や 白帆すぎ行く
蚊帳の外

の子規句碑前に至れば、せんぎよの椿くれないに燃えて青木月斗さんの何やら句も木札に書いてあつた。

○子規の碑に椿の花
の燃えさかり

と出たら目に口ずさんでKさんを顧みたら微笑するのみ。櫻さかりのお池のめぐりに赤い

雪洞は俗臭紛々「源平」と白赤の文字に染めぬいたのれんのある料亭に何やら板前のいそがしさう池に面した大きな料亭にも晝客はないが、午後から繁昌するらしい氣はひを

見せてゐた。

須磨寺へは二十年ほど前の初秋、路郎さんと一しよに詣で、

寺の小僧さんから教盛さんの長たらしい由緒をきかされた記憶がある。あの頃はこの海岸の別荘にみの作君も生きてゐた、玄關へ西洋の猫がぬーつと現れたこと、みの作と仲のよかつた青岸君が、桂さんのやうに大きな頭をして句を作つてゐたこと、みの作君のキモノを借着して行水をつかつたこと、山の手の焚火を火事と間違へて浴槽から飛び出したみの作君の愛人のこと、路郎氏が白い服を着て禁酒禁煙？ だつたこと、青明の死んだ海は荒れてゐた、白い蚊帳の中に淡い夢を結んで大阪の市中へ這入つた時、電車の窓から路郎氏のカン／＼帽が風に吹き飛ばされた珍景！ など次から次と走馬燈のやうに思ひ出される……二十数年後の私がKさんと須磨寺の石段をおりて電車のプラツトへ着いた時踏切の遮断機はデマインと鳴つた。あゝみの作君も死んだ、青岸君も死んだ、白髪

こそあれ路郎氏は健康さうだ、須磨寺へ来る前日筑前橋の事務所で約十ヶ月ぶりに話した。禁煙を近く破つた私とバツトを一日に五つ以上は煙にするといふ路郎氏との話、去年よりはいいさうか愛想があるやうだつた。Kさんは眞をのまぬ一人である、須磨寺の境内で氣まぐれにバツト落しの射的にバツト二個を見事に落した私の姿を見て笑つてゐた。(四月八日)

月評會筆記の思ひ出

奥村丹路

かつて本誌に作品月評會の筆記が毎號連載されて、好評を博し、柳誌に於ける作品月評の魁をなした。當時僕も愛讀惜く能はずだつたが、――その頃は亂耽、愚陀、杏三の諸先輩が筆記の勢をとられてゐたが――一日山雨樓氏の誘ひによつて路郎師の岸の里のお宅へ行つたものだ。その時の顔ぶれは路郎師、霞乃女史をはじめ山雨樓、素人、琴人、町二の諸氏、そして東京の三太郎先生が見えてゐた。若輩新米の小生が末席にあつてお偉方の前に、ビク／＼しながら難談の傍聴を謹しみかたじけなくしたものだ。やがて恒例の月評になつて生れて始めて筆記なるものをやつた。

學校時代にはゾボラでノートもとらなかつた僕だ。且つ可成りあがつてゐることゝしてどろもどろの筆記で、原稿清記の時など、一體何が書いてあるのか意味もとれない箇所があり、それでもどうやら文句の纏足しをしながら緑雨さんとこへ原稿を送つてホツトしたのであつた。筆記と云つても口述されるのを當り前に書いてゆくのであるが、それがなか／＼難しいのだ。路郎先生の口述が一番はつきりしてゐて、句讀點がはつきり分るのだ。こゝで、こゝで○こゝは、と書きやすいこと、さすが月評の先驅者であり、文章家だと思つた。

山雨樓さんはよく逆戻りされた。口述の途中で行きづまられると、「もう一邊さきの方讀んどくなあれ」と来る。そこで僕が讀む、切れた所から山雨樓さんが再び續けてゆく。なか／＼きつちり屋さんだ。

霞乃女史は筆記する口述とたゞの話がよく入り交じつた。筆記してゐるのか、筆記の範圍外の話が判らん様になる。口述の途中で突然早口になつて「大體わてはこゝいふ句が」何とかかんとか言はれる。それに應酬する人がある。と判らん様になる。杏三さんも来て居られて、僕の傍で不安氣に僕の鉛筆の運びを見て居られる。次の鉛筆を削りながら。

三太郎先生の口述には弱つたスピードもあるし、お話の後が入り交る。それをこちらで按配して文章にするのであつた。

このタイプが雑誌には一番苦手なつかしい筆記時代である。

自己辯護

山本葉光

俳聖子規は不治の病ひと闘ふ迄には、よき家柄に産れ、よき土地の師につき、幼少年時代を育ち、中途退學ながら大學にも通ひ多くの友を持ち、従軍記者として活躍をしたので力強い後援者があり、病をも恐れぬ熱心

氏は高等小學二年生の時から打撲傷骨膜炎で、病床廿一年間文學を友として、貧しい老木工の父に養はれ、姉妹に身の廻りの世話をされつゝある田園詩人だといふ記事を読んだ近親者や知人から、忘れられかけてゐる僕を認識して呼び起して呉れた。だが、尋常小學の一年生の半分と三年生の冬休み切りの淺學で、肉體的にも精神的にも、それから後の努力は、非才と共に無駄ばかり多く、働いて呉れる兄のある幸福に溺れ、母の愛のみに馴れ、姉妹弟のない淋しさに情緒的な美しい感情にとほしい事、等々を次から次へと數へ愚痴な言譯を並べて、現在の不甲斐ない自分を慰めやうとしてゐた事を恥じながら、これからでも遅くはない努力を續けやうと思つてゐる。

無理と知る努力

言ひ譯考へる 葉光
(十三、三、二十八)

職人

濱田久米雄

手紙を書いて、切手を買ひに近所の店に入つて行くと、見つけぬ洋服の青年がゐて、なつかしい大阪辯で渡して呉れた。その人は思ひ切つたといふ口調で受取る僕に實に驚く可き言を與へたものだ。……「あんた、濱田はんやおまへんか？」僕は全然知らぬ人が僕の名を知つてゐる

ルビヒサア
社會式株酒麦本日大



松坂俱樂部

會員募集

あらゆる趣味のお稽古場

手はさきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

お稽古
種目

- 長唄 常盤 尺八 舞踊 謡曲 能楽 小鼓
- 小唄 鳴物 元津 尺八 舞踊 謡曲 能楽 小鼓
- ピアノ 聲楽 書道 茶道 俳句 料理 道楽
- 華道 西洋 川柳 棋盤 松坂レコード 吹奏 所

川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當

御申込は
七階 松坂俱樂部
電話 三〇〇三番

松坂屋

大阪 日本橋

る筈はないと思つた。
呆然と切手を持つたまゝの僕に説明する青年は、成程、僕が神戸時代に行きつけの散髪屋の職人さんだった。僕がこの地にゐることは僕の義兄から聞いてゐた。今度九州へ行く用事が出来て西下の途中、親類にあたるこの店へ寄ることにしたが、或は僕に會へるかも知れないといふ氣持でゐた。その晩十一時で發つ豫定でゐたから、若し僕が切手を明日まで延ばしたら、又當分或は永久に會へなかつたかも知れないと云つた。
僕は長身瘦體の特長があつたため、こゝで思ひ出多い神戸の同じ町内に住んでゐて、殆んど口を利いたことのない人にまで話しかけられる餘德があつた譯だと思つた。そして世間はせまいものだ。別に悪いことはしてゐない積りだが、何時何處で、舊惡、舊善が暴露されるかわからない。實におそろしく、又考

へ直すと面白いことだと思つた。

川柳味ある人

長野文庫

六七歳の男の兄がシク／＼泣きながら、道端へ何か落としたらしく、一心にそこら邊りを探し廻つて居た。そこへ通りかゝつた商人風の男が「坊ちゃん何か落としたのかい」と、親切氣に尋ねた。子供は涙に濡れたらしい顔を上げもせず「今こゝに一錢落としたんぢやが、それが見付からないんで——」と、その眼はなほも地上から離れない。「そうかい、そりや一體どの邊だい」と、男は暫らくそこら一帯を探してやつたが、どんなに馳けて行く途中に落としてそれがゴロン／＼と轉がつたものと見へて、その邊には一錢銅貨の影も形もない。

探しあぐんだ男は「ぢやあ、おぢさんが一錢上げるから、泣くんじやないよ、もう捨てんやうに早く歸りよ」と懐中から一錢銅貨をとり出して、手を子供のの方に差し延べたが、子供は平素見知らぬ人から物は貰はれぬと云ふ風に躡けられて居るのか容易にそれを受取らうとはせぬ二度、三度斷る子供に愛想をつかしたのか、男はそのまゝ數歩足を進めたが、突然手にして居た一錢銅貨をポトリと地上に落とすと同時に「坊ちゃん、坊ちゃん、こゝに一錢落ちて居るよ」と、今自分が落とした一錢銅貨を指させば、子供は顔を急に輝かし、喜びの色を面に現はして飛んで来て、大急ぎでこれを拾ひ「おぢちゃん、有難う」と、さも嬉しそうに、どんな走り去つた。こんな話は他にもあるのであらう、筆者もかつて

何かで讀んだ様な氣がする。併しこれは話ではない筆者が先日市内のある裏町で實際に見た風景である。
男の探つた態度は頓智ではない。これこそ川柳味ではあるまいか。
雅號のこと
吉田水車

雅號から來る其作品の内容の感じは少しも變らないけれ共雅號のみから受ける其藝術の品位的批判は稍々もすると誤られ易い、此意味からして雅號はまことに大事である。先日靜岡の榎田竹林氏が珍竹林から變へられの時上記のやうな意味のことを述べられてゐたのは至極尤なこと文壇から尠くとも繼子抜ひを受けてゐる川柳が其原因を作者の雅號の不適當からばかり蔑視を蒙つてゐるのだとは勿

論斷する譯には行かないが、句その物の藝術的向上に努めると共に竹林氏と同じ意見のもとに雅號の不適當をおもはれる柳人自身がゐられたら躊躇なく改號の途を講ぜられたいと希ふものである。
三等寢臺
中西おさむ
ある女給客に向つて、
「男の人つてみんな自惚の強いのは呆れて仕舞ふわ」
聞いてゐた色男頷を撫でながら「本當にその通りだ、然し其の點僕なんぞ自惚れる必要がないから氣が樂だよ」
唯だ私一家が北陸人特有の面貌を持つてゐるのを、自身で氣付きあつて好く笑ふ時がある。そんな場合、私は非常に心が落ちついて、故郷といふものをしみじみ味あふ事が出来る。だから街頭にみた男女の面に、ちよ／＼北陸的な面をみるとたまになく、なつかしい想ひにしたる私である。

かほ

酒井斗風

街を歩いてゐても、電車に乗つても劇場へ行つても、その他人の多く集まる、いろんな場所へ行つても、まづ何より人の面に心を曳れるのは私だけではないと思ふ。
ある有名な小説家が云つてゐるやうに、俳優もまた、類型である」とかのむづかしい事は知らないが……
唯だ私一家が北陸人特有の面貌を持つてゐるのを、自身で氣付きあつて好く笑ふ時がある。そんな場合、私は非常に心が落ちついて、故郷といふものをしみじみ味あふ事が出来る。だから街頭にみた男女の面に、ちよ／＼北陸的な面をみるとたまになく、なつかしい想ひにしたる私である。



近作柳樽

麻生路郎選

北滿の便り(三句)

北滿の便り鋭き瞳を思ふ 神戸 楊井二南
 生還の望みさら／＼書いて來す 同
 武運長久滿洲の端の端 同
 上席にゐて敬遠に氣がつかす 同
 全快はしたがひがんだこゝを云ふ 同
 停電の部屋出て行かぬ律義者 同
 洋服ダンスに疲勞を封じ込む 同
 教へ子を勧誘員として訪ね 今治 長野文庫
 ひやかしの心を掴む特價品 同
 一理痛づゝある露次の口喧嘩 同
 あきんぎのさもしき金へお辭儀をし 同
 先代は粒々辛苦するが好き 同
 使はれる身の唇を嚙んだだけ 同
 腹立ちを井で消す女にて 兵庫 田邊由布
 タラップへ行李が重い稼ぎの娘 同
 老母病む 同
 七十の病へ飴の効も説き 同



退けて來た聲を待つのか眼を覺し

老母死す

亡き母のこたへけるかな燈のゆらぎ 同
 南無阿彌陀逝きにし母は名もかはり 同
 物干の草履に雪の正直さ 大阪 富本無煙
 入札へみんな常着の同業者 同
 京染や顎引き込めて定期券 同
 人絹の京の女給の春淋し 同
 呼出電話走つて行けば食事中 同
 春泥に切符制度の油浮く 豊中 阿部閑生
 雀の子一つはぐれて暮れかゝり 同
 儲けるに耻も面子もありまつか 同
 兩隣り銃後の赤子奪ひあひ 同
 現金で拂つてくれるかこも聞けず 大阪府 川村春月
 便箋にたつた一枚なる便り 同
 吞みにのくうしろ姿の父さみし 同
 ほつこいて頂戴急所つかれたり 同
 軍事便つたなきペンも親しまれ 大阪 石田沐天

春の街自稱奇人の髯ミ逢ひ 同
 行末は語りこむないハイヒール 同
 解消の責に男が藉りられる 同
 陽はうらら小鳥飼ひたいなと思ひ 尼崎 酒井斗風
 純喫茶カフェーになつて素通りし 同
 仔犬の器量ほめてる仲居さんの閑 同
 自己にさへいつはり多き暮しかな 同
 春風にはこりの中の合トンビ 奈良 鹿田嶋田翠峯
 春風に泛子を見詰めてゐたりけり 同
 馬の息地べたへミぎくやうな坂 同
 國境を越えて働く口があり 同
 入念に猫お洒落して雨ミなり 下關 櫻川不水
 お忍びは隣りの三昧を聞きながら 同
 やゝこしいミこは雜費にして終ひ 同
 春の汽車迷ひ子乗せて驛へ着く 同
 お悔へもう諦めた父であり 大阪 富岡巨人
 子澤山發車のベルにあはてたり 同
 お得意へ秤はビンミ跳上り 同
 ビクニツク歸りは父の背で眠り 同
 高源の瘤起へ落ちる陽に黙り 名古屋 鈴木可香
 見くびられさうに講談雜誌讀む 同
 豪華版象が大きい花まつり 同
 戦時下にバチンコばかりよくはやり 名古屋 林世香
 やむを得ぬ値上げすこし型を替へ 同
 病名にふれたくはないオブラード 同
 するりつミ袖すべらした腕時計 廣島 福岡葉留路



落ちさうに郊外の星光つてゐる 同
 ハイヒール今日は和服で出かけた 同
 靖國で逢ふ約束を生き残り 大阪 大鶴喜由
 陸じさ風を引くのも二人なり 同
 神詣で中千本は暮れのこり 同
 エノケンの顔が眞面目な座談會 松江 田中都之助
 遠からず辭める氣になり繩のれん 同
 男なら寐てすむ事をまだ喋り 同
 家主の子は支那兵に選ばれる 兵庫縣 阿萬々的
 口笛が雲雀の空へ飛ぶ氣持 同
 通釋の聲も酔はせて櫻散る 同
 家屋敷賣つて故郷に用もなし 廣島竹原 黒本芳泉
 相場欄小金があつて面白し 同
 艶つぽく笑つて煙草抜き取られ 同
 繪襖に大きくゆれる雛の影 松江 白石紫薇花
 竹の子が一寸伸びた騒ぎなり 同
 ハイキング桃の村から桃の村 同
 一つだけ灯りが残るビルの窓 大阪 田中風葉
 板の間へ茄子轉ろがして留守の家 同
 死線を越えた兒の顔色の頼もしさ 同
 三ヶ月の向ふに旅の灯を見つけ 満洲 福田岬氣郎
 敵は只科學にたよるもろさなり 同
 流言へいつでも逃ける荷をまこめ 同
 人間もバクテリアも持つ生存權 名古屋 平田素天
 人造が流行る銃後の頼もしさ 同
 春の陽に陰を這はせてグライダー 同

なぐさみに編むチョッキらし春に 兵庫縣 酒井美知夫
 晝の風呂女將に炙のあきがあり 同
 セバートの肉へ通ひが出来てくる 同
 雪搔くも女給としての宣傳か 長野縣 林 幹
 キリストも偽り多き世に疲れ 同
 借金が出来ればいゝ、と褒められる 同
 塩鮭で父ちゃんに飲む子は食べる 愛媛大洲 米澤曉明
 卒業を近づけさせる柳の芽 同
 花形になれば郷土に容れられる 同
 汽車辨を買ふ楽しさの旅に出る 大阪 古寺謙南坊
 蜜豆へ雛妓二階の窓を開け 同
 いゝ夢を終點へ來てゆすぶられ 同
 約束の日へ集金は強く來る 長野須坂 高峰柳兒
 吊革へ停年迫る身をさらし 同
 不覺にもいつしか貢ぐ戀になり 同
 惜しみなく出す就職したいため 下關 多田市他樓
 肩越しに見送るものは伸びあがり 同
 ついて來た犬改札で叱られる 同
 小説もそうよと妹ませて來る 尼崎 山田南濃路
 皆勤の賞與が妻の慰安料 同
 質屋出た女に妻のおされ氣味 同
 夕暮の色が好きよと淋しい娘 豊中 金田並木
 口紅の濃さへ北風まこもなり 同
 呉服物賣場でエスカレーター終ひ 同
 又一つ金魚が死んだ朝の膳 石川 上末政掬水
 禁札へ毒づくほきに酔つてゐる 同

君が代は千代に八千代に勝ち戦 鳥取 杉谷湖山
 こう塗つて置かねばならぬ世界地圖 同
 お土産は無理に寐てゐる兒を起し 大阪 多田一波
 花見酒こゝもあつちも軍國歌 同
 松竹座妹洋装姉和服 大阪府 西尾榮
 食べさせる方が大きい口を開け 同
 女文字話題をまいてゐる寄宿 今治 田窪良矩
 不了簡赤い煉瓦の内に住み 同
 下腹へグツミ短所を押さへつけ 大阪 米谷松太樓
 出勤へ坊を門まで抱いてやり 同
 送らるゝ歡呼へしばし無言なり 廣島竹原 谷本朱雀
 あゝもしたいこゝもしたいと慾な夢 同
 吸取紙入墨に似た色になり 布施 福井尺琴
 金齒さんと言ふ愛稱で呼びはじめ 同
 ハイキングふみ山肌の煙を見 大阪 馬越華蝶
 堀割の筏が邪魔な渡船なり 同
 角立たぬ様にと女房口を入れ 廣島竹原 梶川榮三
 少々の傷なら癒る母の唾 同
 跳釣瓶びんミ上つたよい天氣 大阪府 毛利稔幸
 綱帶をして來て友に取りまかれ 同
 思ひ切り泣けと親友慰める 廣島竹原 瀬戸斗秀
 こつそりと裸一貫故郷を立つ 同
 驛長も工事見てゐる春のさか 大阪 田中補美
 沿線に住みたい花が咲いてゐる 同
 高い窓希望の雲が覗いたよ 松本 小宮山雅登
 顔洗つたさあ恐怖だ犇めきだ 同

趣味の古本屋
鬼文堂
心斎橋南側
東へ二丁北側

北をきむ君出征激勵會

(喜久屋にて) 沼波美智君撮影



本誌で才筆をふるつてゐた漫畫家北みきを君が遽に應召され篠山古賀部隊に入隊することになったので、小川武、麻生路郎主催の下に心友十名が十三日の夜「みきを君出征激勵會」を心齋橋筋の喜久屋で開催した。

川柳人にしても漫畫人にしても、打てば響けである。「な」ミ云へば「ん」ミ答へるグルッペだけに、素天邊から挨拶なんか抜きにしてこいふ挨拶で旺んにメートルをあげた。流行の時變漫畫を描き續けて来た北君だ。筆が剣に代り長髪が丸刈に變つただけで、なか／＼元氣がいゝ。やつてくるぜミ云へばシツカリ頼むぞ僕もあきらから行くよこいふ血色のいゝのもある。宴酣して、みんなで漫畫の寄せ書き

きをやる。北君は投げ飛ばされた豚を描く一同拍手。記念撮影をやる。最後に麻生路郎の發聲で北みきを君の萬歳を三唱して激勵會の幕を閉じた。次に出席者を寫眞説明によつて記録しておく。前列向つて右から

麻生路郎、北幹夫、小川武、吉本繁樹、中列右から中川幸五郎、竹中アキラ、沼波智美、後列右から川内春一、種元一郎、住田保太郎、射庭義春の諸君。喜久家を出た半數はくるまを飛ばして北大阪のまんかつ喜多八を襲ふ。トン／＼拍子に勝つミは縁超がいゝ、増築の一室を占據して再び祝盃、エツチャンやキミチャンがエブロンを外づしてのサーピス振り満喫し喜多八老の望むが儘に一同壁面に漫畫や川柳をサーピスし北みきを君の武運長久を祈りつゝ、引あげた。

戦線と川柳

新聞紙上でよく戦線文學が紹介されるが、その中でも川柳は相當人氣者になつてゐる。

最近の大阪朝日に、川柳子として又書家として上海方面

派遣軍各部隊中に聞え

た野口茂樹部隊長はこのほど來、同部隊を中心に川柳同好の將兵が戦陣の餘暇、協力してガリ版刷「川柳集」を發刊し陸軍省はじめ各部隊へ寄贈したことを報じてゐる。

その「川柳集」に投じた句の中から六七句が掲げられてゐるのを読んで見ると、技法に多少難のある句も交じつてはゐるが、戦地にあるものでなければ擱めない句もあつて面白い。愛妻に生れ出ぬ子の名を送り

全国便箋

といふ句がある。戦陣の餘暇にはこれから生れる筈の子の名を考へたりしてゐる兵士の間味をうれしく思つた。便所にも貼る便箋は的確に

川柳で慰問

本誌でも毎號戦地からの句を掲げて戦線文學の紹介にはつとめてゐるが、戦地へ行つても川柳がつくれたり味つたり出来ることは、大きな慰安であると思ふ。(不死鳥)

川雜今治支部では今回川柳句集「車座を刊行し」廣く全國柳人に頒布すると共にその内三百部を皇軍慰問並びに傷病兵慰問として献本の手續きをつたが、この計劃が陣中にある同支部の

幹事で市立青年學校の指導員である月原啓明君に傳はるや同君は遠き第一線より欣然これに参加陣中吟數十句と激勵長文を送り來り、大いに殘留川柳人を感じせしめた。句集名は同君の「車座で慰問袋のひもを解く」からとつたものである。

制酸
鎮痛

〔主治効能〕

胃酸過多症
胃痛、溜飲
惡酔、宿酔
さけ、たばこの
のみ過ぎにも

ノルモザン錠は、胃壁を全面的に防護して、胃液の刺激を去り、胃酸の過剰分泌を抑制し、胃粘膜過敏による疼痛を鎮め、オクビ、ムネヤケ、胃のモタレ、キミツ等の症狀を除いて安全に治癒に導きます

【規格】
一日 分二〇錠
三日 分六〇錠
約一週間分
十六日 分二四〇錠
一ヶ月 分二四〇錠
二ヶ月 分四八〇錠

ノルザモル錠

店商衛兵長田武 元賣發
町修道區東市阪大



山芋のこゝで姉妹もめはじめ 大阪 竹内美津枝
 半分はうそにして待つ金儲 同
 拾ひ屋の生活犬が飼へるなり 尼崎 北川春巢
 バン又はホワイトライス付くランチ 同
 故郷の夢母の夢旅の空 豊後大洲高月溪月
 街の灯へ旅愁をそゝる雨の音 同
 蜘蛛の子が達者にゐるる國旗竿 大阪柏原宮岡公子
 ライト様へ
 長男ミ云ふ産聲に櫻咲く 同
 合オーバ有つて一日持ち歩き 大阪 和久双葉
 仲裁が這入つて喧嘩もめ直し 同
 大阪の氣球豊かな春の空 尼崎 飯尾寄典史
 葉櫻になつて凱旋命下る 同
 サービスに追つかけて出る酒場 大阪 岩橋双虎
 サービスへ悲鳴を上げた財布なり 同
 口癖の「馬鹿」にかしづき四十年 廣島竹原小田小輩
 倦怠期妻も疲れたなと思ひ 同
 吊革へ届かぬお手持ちたがり 大阪 山川富士
 仕舞湯臍までなうて風邪を引き 同
 英靈へそほ降る驛の白繻 熊本 永汐薫城
 幼名へ村一番の母になり 同
 摘草へ驛がだん／＼遠くなり 大阪 竹内春坊
 記念樹へ一年生は小さく居 同
 子の寐顔しびれる腕の上にある 廣島竹原小田祖子
 物質に恵まれ戀のない男 同

死ぬ様になつて娘の居所知れ 大阪 片山鏡水
 未だ眉の引けない顔で女給来る 同
 出世して寺に大きな施主の札 豊後縣 武田京司
 次々に母の心配はてしなし 同
 前身は女給二人で飲みに出る 大阪 山本葉光
 薄氷を踏む氣で機嫌さりむすび 同
 今一人殺した醫者知らずに來 同 宮口芳醇
 應援歌選手さうやら泣いてゐる 同
 春が來た、春が來た洋服が破れてる 同 泉流葉
 銀狐首に居れないあたたかさ 同
 海原へ別れのテーゾ引いて行き 大西治水
 汽笛ふみ湖水の上で消えました 同
 親の顔兒の顔あやす人の顔 石川松島みどり葉
 目覺しを止めて春眠貪りぬ 同
 パーマネントおむつの下を歸つて來 大阪 落合陽左右
 別荘からバスの埃を遠くみる 同
 ブラネタリウムふつみ地球を忘れ 同 矢杉雪春
 行倒れみんなたかつて見るばかり 廣島 河合白外郎
 春風につい誘はれてハイキング 大阪 松永幸葉
 銭湯へ大きな金魚持つてゆき 廣島竹原住澤紫蓮
 赤帽が走つて列車出る時分 大阪 小谷清
 ハイヒールふみ砂利道をそれて行き 同 松倉白猿
 春風が戀だ戀だささやいた 大阪 澤田粒子
 國を揚げて國防色に塗り替へる 同 松原岳峯
 赤だすきサラバだけは云ひ得たり 尼崎 天羽鳴路

祝創刊五十周年廣告を募る

★一口一圓（幾口でも）
 ★一頁は三十口
 ★締切 五月八日
 ★宛は

大阪市西成區玉出本通三丁目三六

川柳雜誌社（振替大阪七五〇五〇番）

★切手代用可

★さうかよろしく

ハイヒール妹はそつと穿いて見る 大阪 綿小百合
 汐干狩彼女の脛のあざが知れ 廣島竹原西野詩吐
 鼻唄で按摩は晝の風呂へ來る 大阪 野本吞水
 咄、雷よなんぢ元來虚勢だよ 高松 楊柳夢
 少女の會軍用列車にお茶をくむ 大阪 岩本武子
 バラソルの二つ三つ行く春霞 廣島竹原西野旅人

會談座動移柳川

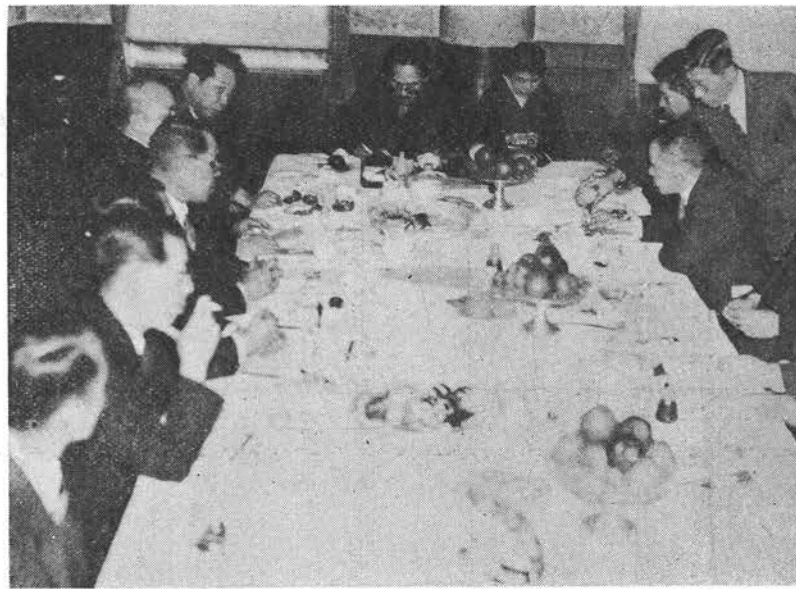
々人の會柳川大阪 (1)

(略稱敬同不順)

漫
同
影

長崎 柳 利 丸
笠原 柳 利
布崎 柳 利
小崎 柳 利
佐竹 柳 利
押谷 柳 利
内海 柳 利
坂口 柳 利
浦田 柳 利
吉田 柳 利
西北 柳 利
小川 柳 利
北川 柳 利
沼波 柳 利
智美 柳 利

司會



景風會談座

そのグループがどんな人たちで構成されてゐるか云々ことを川柳移動座談会の形式を藉りて知ることにした。各地、各会場の要請を乞ふ(編輯局)

醫者を詠んだ川柳に就いて

利生「阪大川柳會では、いつも漫談

がはづみですが、今日は一つ話題をきめて座談會を開きまして『川柳雜誌』の方で適當に取捨して頂く事にいたしました。「醫者を詠んだ川柳」について御感想の發表をお願いいたします。

芳一「柳秀先生はお急ぎのやうですからお先へ談して頂いたらどうでせう」

利生「では、どうぞ」

柳秀「僕の知つてゐる範圍では醫者の句はあまり澤山にないが、中條流の句は一通り見た。

中條流といふのは墮胎を專業とした女醫者(今の婦人科醫)のこと、中條流の元祖は豊臣秀吉の家來で中條帶刀といふ産醫であるが元祿の頃から墮胎専門の醫術を業としたものが江戸の各所に散在してゐた。中でも橘



路生君



貞三君



芳一君



方正君

町の裏通藥研堀にあつたものが一番繁昌したそうである。入口の暖簾には紺地に白く一ツ巴や枳形を染抜きにしてあつた。句としては

中條はむごつたらしい藏を建て

中條の靜に暮らす恐ろしさといふやうなのがある。春巢が醫者をよんだ川柳を銀杏(雜誌)へ出してたが、何號やつたか忘れたが」

路生「持つてますか」

春巢「今持つてません」

路生「句は覚えてるでせう、昔の句ですか」

春巢「醫者と藥に關係した句を集めたんです。」

芳一「阪大川柳會から出版した大川端から句をひろいました。」

其の中で第一は醫者の言葉つかひや態度などが患者や家族かの者にふれたもの。

第二は醫者が折角施してゐる仁術に對して患者やその家族の面白くない態度や心持を詠んだ

もの。

第三はじよさいのない醫者をよんだものと別けてみました。先づ第一の患者や家族から見た醫者の句を讀み上げてみますと方正さんの

利生さんの

此足大根ぢやありません先生私の

氷割る音へ博士の遅いこと湧三さんの

捕まへる様に容態聞きに来るたけをさんの

手落とも言はず博士はあはてたり(たけを氏曰く、私は博士ではありません)

同じくたけをさんの

今濟んだ手術先生無口にて

次に第二の醫者から見た患者や其家族の態度をよんだものをあげますと

湧三さんの

世間體主治醫丈けでは物足らず利生さんの



君川筑



君舍橙



君浦正



君秋千



君 秀 柳

君 子 附 香

君 を け た

君 巢 春

君 生 利

君 榮

け
橙舎さんの
咽喉元を過ぎりや薬價の不服なり
第三の醫者の如才ない處を二三あげ
ますと、
たけをさんの
往診はこんな梯子も登られ
湧三さんの
温泉の効能笑ひ／＼聞き
などですが

利生「醫者自身が主觀的に云つた醫者の
句はありませんか。路生さんはどう
です」
芳一「路生先生は大川端に醫者の句はあ
りませんでした」
路生「そんな句は詠まんことにしてる」
芳一「醫者の句は、たけをさんが一番多
いやうです。」
利生「然し民間の者が見る醫者と吾々が
見てるのは違ふでせうね。」
柳秀「誰やつたか夕涼みの中を醫者が
往診にゆく句があつたがな、淋病を
詠んだ句では。」
君もかと外科の廊下で笑ひ合ひ
といふのがある。」
路生「筑川さんの句に
謹嚴の彼も人の子プラスなり
といふのがある」

利生「醫者と辯護士とはよく似たもので
到底こんな病人はあかんと思つて
やうな病人でも兎角この大學の先生
に一度診て貰ひたいと私のところへ
云ふて来るのがありますが、手遅れ
になつてから診て貰つてもそれは到
底だめなのだが、それでも診て貰ふ

といふのはまあ病人の氣休めとかい
ろんな名譽欲のやうなものが手傳ふ
のでせう。
大學の博士死水とりゆき
といふのはそんな場合の句でせう」
芳一「春巢さんは學生時代に醫者を詠ん
だ句がありますか」
春巢「醫者といふ句ひで醫者がすれちが
ひ——自分ながら藥くさいやうに思
ふ主觀の句です」

路生「方正君、天賦羅ばかり喰べてんと
チト喋べりたまへ。」(笑聲)
方正「私は手前みその句を作りました。
迷信へ相植をうつ流行醫」
路生「あんたの句に、なんや耳さうじし
てたら女が眼をねむるかいな、いふの
がありましたやろ」
(方正さんきぬ／＼程に叩かれる)
方正「みみそうじしてくれと醫者をおこ
らせる
といふのですが」
利生「婦人科の醫者はどんなだらりとし
た風で診察をしてるのだらうと考へ
てる人もあるでせうが、私の句に
嚴肅な態度でみてる婦人科醫
といふのがあります。これは婦人科
醫のために辯明はつとめた句です」
柳秀「小林君はあれへんか、醫者をよん
だ句」
利生「小林先生は醫者さんと婦人とい
ふやうなのがありさうなものですな
橙舎「ありすぎて困る」
利生「發賣禁止ものですか」
方正「やす／＼と腹を開いて診るといふ
といふのがあるね」

芳一「布施先生の句は」
筑川「醫者なれや御前の腹を打ちつ
押し」
柳秀「僕の句に
醫者すれば食ひはぐれなどな
いさうな
幸に人が病むので醫者が食へ
といふのがある。
内科とも外科ともかゝず田舎
醫者
路生さんにすまんけど
下駄の数はどははやらぬ小兒
科醫
次は春巢君にすまんけど、
看護婦の詰所でもてる宿直醫
宿直するやうな醫者はみんな若
い醫者や詰所へ行くとワイ／＼
云うとをるわ」(笑聲)
橙舎「これはドイツの諺ですが醫者
の顔つきを三つに形容してあり
ます。見にゆく時はエンゼルで
診察の時は神の如く藥代を拂ふ
時は鬼の如くと云ふのです」
路生「但しそれはドイツのことで日

本はちがふ。よう書いといて貰
はんと」(筆記者の方へ)

利生「苟だ敷だと云はれ金をため
待すのも信頼させる醫者の手だ
これは私の句ですが、古句にも
こんな句があるでせうね」
路郎「古句に體もせぬくせにやぶ醫
の何のかの
といふのがあります。イヤ今日
は僕はしやべらぬことにしてあ
ます。」

路生「それがえ、今までのうちで
一番うまい」
利生「阪大川柳會でも大分醫者に關
した題を作りました。外科、手
おくれ、院長、看護婦、ピンセ
ット、まだあつたやうです。
今夜は座談會の方はこれ位にい
たしまして又句會にひきもとし
ませう。新しい題でステイブル
ファイバーと云ふのでやりませ
う」(文責筆記者)

★新緑のお寺で、久し振りに落ちついた句會を開くことにした。柳
友の御來庭をお待ちする。
★席題一題十四字詩を課することにした。はじめての方も試作され
たい。
四月二十八日(木)夜六時半
大阪市電清水町停留所北ノ辻西入
聲得寺 (電話南四八八六番)
「豫算」三句
十四字詩に就て
三〇錢(川端會員章提示の方は二五錢)
大阪市西區筑前橋電停前昭和ビル三二號室
川柳雜誌社事務所
幹事 潮花・水客・ライト・變人
電話土 3333
8163
8164

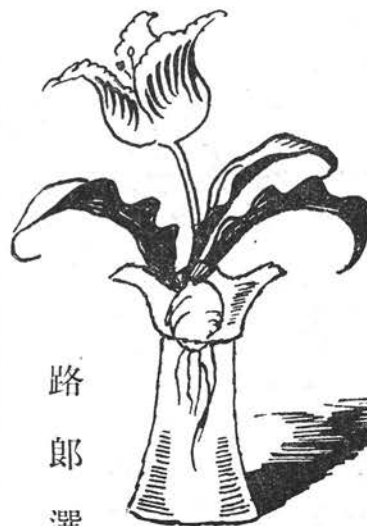
川柳雜誌社 四月例會

乞鉛筆持參

會 柳 兼
費 話 題
會 場 時
日 時
會 場 時
日 時
會 場 時
日 時

川柳雜誌社事務所

川柳塔



路郎選

大阪橋本緑雨

雀のお宿一句
京の街雀のお宿探しあて
會計は座つたままでめしになり
出盛りの街を夫婦は手をつなぎ
算盤のこれぬ話だ断はられ
猫柳むしりごられたハイキング

兵庫縣 水谷 鮎 美

ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド三人の唇があき
見あぐれば掃除夫なりき高くるる
頭痛する酔ひは生毛を剃らぬ妓ら
新築の灯にふうはり三木のかほり

大阪市場 夜食子

世帯瘦せして素直から遠ざかり
役柄が金が不遜な人にさせ
汐干狩好かぬ男がカメラ向け
情報部やりをつたな緊張し

竹の子やまだ眼科醫へ通ふてる身
ハットしたとこでニュースの場が變り
軍事便星のふへたも書いて来る

名古屋 吉田 水車

タイピスト又目薬をさしに立ち
兩隣赤ん坊が泣き犬が鳴き
新妻へ電氣アイロン重たすぎ
新妻の早くも戦なる暮し
ツシリヅシリと男二階を下りるなり
春泥をけちらして行く靈柩車

大阪府鳳町 妹尾 變人

妹の食慾を知るハイキング
お隣りの電話を借りて嘘を言ひ
かくてその慰藉料をやらせしめられ
金のある事にされてる禿工合
から車我が家へかへる音を立て
賣られたる土地は知らず麥は伸び

大阪大西 八歩

十燭が寂光に見え家内無事
鰯焼くにほひこなつて客は去に
花ぐもり妻は日本の生れだち
自轉車の手ばなしで行く夕櫻
言ひ勝つて白髪へすまぬなと思ひ

大阪後藤 青兒

再縁の不安を拭ふバラの花
卒業をしても羽織だ帯だ下駄
へつらつて出した茶碗は縁が缺け
五千圓預ける方はちびた下駄

大阪府柏原 宮岡 白峰

歩で仲して行けば理想だなと笑ひ

非常時云ふ日本へ男の子

皇軍の武運長久を祈願して
南米の櫻も咲いてゐるよ君

大阪加藤 ライト

念を押すこで一通話を切られ
待たされて居るを雑誌へ忘れかけ
來年がきつちり云ふ服を買ひ

大阪正本 水客

土砂降りのなかへ書留届くなり

川・柳・書・架 (七一)

柳風狂句
改正人名録

▼本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

一本書の凡例を抜く。

レカ定メ難キモノアリ譬バ狂句
百家仙中ニ飛躍ノ牛目(ゴモク)
「ギウモク」トシ同田民「タ、
ミ」チ「デン」トセシシ類アラ
現「羽前」ノ「米善」ノ如キハ
「コト」ヘ「ヲ」素ムベシ其他「丸
々、清川、春柳」ノ類皆訓不明
ノ分又相同ジ

錦屋

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何

一投稿中傍訓ナキ雅號ハ音訓何



美髪は紳士道！

フケ・カユミを止め白髪・若禿を防ぎ
明らかな青年美を創る伊豆椿ポマード
頭髮のホルモン劑 (コレステロール配合)

伊豆椿 灰皿ポマード

御使用後ごても
スマートな灰皿
になる新案容器！



舗本油香椿豆尹
園芳彩楓大

全國百貨店、有名化粧品店
薬店、小間物店にあり

ラッシュ・アワー苦勞して新聞を讀んでゐる
子を負うて電車の揺れへシヤンミ立ち
驛長が笑つて過ぎる田舎驛
齒ブラシをさめて飛行機見る日向
番號をつけデンデン虫を庭へ捨て
泣けるだけ泣いたら明日が開けさう
月の出を芦のあひから見て夜釣り
風見草寫して水は青く澄み
朝夕は男ばかりの渡し船
兵庫御影 長崎 柳 秀
心臓の弱さに切れぬくされ縁
働きに行く口紅を母案じ
腕組をしてる板場の閑な夜
誰にでも出来る旗なり日章旗
日章旗もつて支那人媚を見せ
金澤 安川 久留美
木瓜なぎに口づけ給ふマダム振り
豊満な肉に陽ざしの四疊半
狡猾は眼鏡の底に氣味悪し
不平、不平卓を叩いて水を呑む
御馳走の中にミけあり金のこ

悪智慧に猛けて重役背が低し
紐を見て禪ミ知る慰問品
今治 渡邊 曉 童
酔うて歸れば子が起きてゐた
こゝろよき思ひ出さなれカンニング
箱を生む竹藪の風四月
廣島 植山 九天
春ちらりオーバーのボタン切れてゐる
スキツチを入れるミ彼岸會のお経
妻を待つ小一時間なり特價品
子の割つたコーヒータ碗に花が散る
廣島 濱田 久米 雄
御不満の捨て場見つけて金がなし
春の夜夫の靴を磨いて寐
左様なら手を舉げる癖ついてゐた
國歸り地酒で父をまくし立て
額縁の繪を變へ心機一轉か
愛媛大洲 今川 棕 影
鬼は外火鉢へ一家まるくるる
色街は廻舞台の様に夜
腹立ちは煙管の音に傳はりて
俳優になれミは賞めた心算なり

戦地より

在中支那 月原 宵 明

今は亡き戦友の碑へ乾きぬ
ガス弾を打つて退却すると決め
祝盃へ陽は東より東より
敗けた方ニライで使はれる
見世物のように地雷は掘り出され
空襲もなくて鳥の群がゆく
報導の尊き使命へ虫の息
酒保歸り歩哨に濟まないと思ひ
祝盃へ迷夢醒めざるまゝ濁り
揚子江の偉力はつきり羅店鎮
砲彈入陵武士の情で手を觸れず
中正へ判じてくれと母の文
陣中へ語つて餘りある飯盒
戦績を海所見(三ツ)の波とな
黄浦江長崎丸に上海の春
憲兵そここに上海の春

云々
▼目次を列挙すると、車座(月原宵明)奉公袋(石手向上庵)松かさ(谷心府)追憶(渡邊曉童)銃後から(長野文庫)

九番地川柳雑誌社支部
▼本句集は川柳雑誌社今治支部
同人が各自の句集を合纂年刊と
したもの。斯くして足跡を遺し
て行くことはい、試みである。

の收獲を纏めて一冊とし、廣く
世に送り出して來た吾等今治柳
界の同士、茲に順調に第四輯を
發行する事が出来たのを欣ぶ
▼昭和十三年四月五日發行、四
六半載五〇頁、非賣品、編輯兼
發行者今治市神明町百番地辰野
軍四郎、發行所今治市寺町一三

★柳人素描

(二五) 菊川泰平樂著

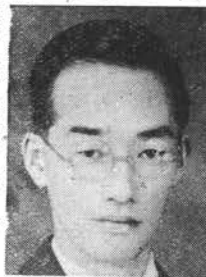
滿洲の土になる——といふ言葉は誰でも云へそうでなか／＼云ひ切れるものではない。そこに人間の強さと弱さとをハッキリ見ることが出来る。わが菊川泰平(たいへい)君は、その前者に属し國際運輸株式會社社員として安奉線安住の地と定め全滿洲に根を張るべく活躍してゐられる事は壯とすべきである。



君が川柳を作るやうになつたのは朝鮮柳壇華やかなりし大正六年頃だそう。その頃の居残り組とすれば鮮満川柳壇では古参株だ。君は兼二浦在住時代、柳誌「華かづら」を五ヶ年間刊行して朝鮮柳壇のため氣を吐いたものだ。次に君の作風を掲げよう。

春の色心に觸れるものばかり
微笑めばスケートの子の頬赤し
男親二人浴びせて草臥れる
君は姓を菊川、名を泰平、別號を東鶴莊と稱ふ。明治二十八年九月八日、山口縣上ノ關に生れ、夫人沙知さんとの間に一男一女がある。短文學、スケート、登山を愛好。名譽職としては協和會評議員、義勇消防消防長。川柳關係では奉天、滿洲野吟社同人、川柳人協會評議員。

暇さへあれば旅へ出てゐる水客(すみきゃ)君は、冗談一つ云ふにも姿勢をくづさない。大概一人旅で、未知の土地へ踏込んでゆく心のときめきがたまらなく好きなんだ。そして嫌ひなものには貝類と酔つ拂ひだそう。な君が川柳に手を染めたのは昭和八年の夏だと聞く。



待受けへあしのかの聲が聞へます
竹の皮冬の音して踏まれたり
高島田うつわくものに出て居り

(二六) 正本水客君

國もこに出世を願ふ母があり
出世なき思はず酒を飲んでゐる
錦着て雪の峠を越える旅
出世して世間の義理をうこんする
嘶家の出世十年一こ叩き
出世して他人の家をきたなかり
平凡に生きて出世なき考へず
出世して母の努力が世に知られ
同窓會晴の出世へ打電する
出世した弟の家で父は病み
仲人を訪へば出世をよろこばれ
出世して歸れば村もいよいよ
子の出世見て死にたい母は病み
母一人子一人今日の出世見る
出世して嫁いだ頃の荷の話
子澤山出世を昔の夢にする
成功は先祖の法事見せに來る

久良伎翁古稀祝賀記念品贈呈に就いて

日本柳壇の耆宿坂井久良伎翁(川柳人協會名譽會員)が、齢ひ古稀に達したことはまことに慶賀に堪へない。翁は資性穎敏直情の人、私財を投じて多年、柳壇のために貢献されたとは何人もよくこれを知る。茲に我が協會は古稀祝賀記念品贈呈金を普く天下柳人に募る事とした。左記小規に記念品贈呈に就いて



一路集

出世 不浪人選

國もこに出世を願ふ母があり
出世なき思はず酒を飲んでゐる
錦着て雪の峠を越える旅
出世して世間の義理をうこんする
嘶家の出世十年一こ叩き
出世して他人の家をきたなかり
平凡に生きて出世なき考へず
出世して母の努力が世に知られ
同窓會晴の出世へ打電する
出世した弟の家で父は病み
仲人を訪へば出世をよろこばれ
出世して歸れば村もいよいよ
子の出世見て死にたい母は病み
母一人子一人今日の出世見る
出世して嫁いだ頃の荷の話
子澤山出世を昔の夢にする
成功は先祖の法事見せに來る



久良伎翁

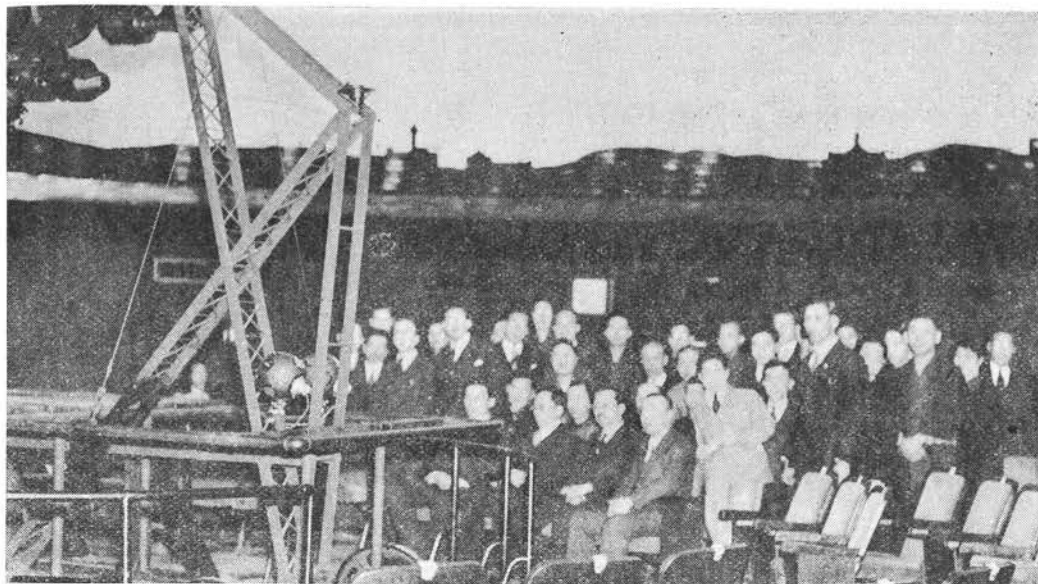
據り御賛同を乞ふ。
一、記念品贈呈金は一口三拾錢のこと(一口分を頗る小額とした理由は川柳人及び川柳に關心を持つ人々の一人でも多く賛同せられんことを希望するに外ならない)

幾口でも申込んで下さい)
一、記念品贈呈金の受付は八月三十一日までとしたが、賛同と同時に、御送金ありたい。
(比較的長期とした理由は出來得る限り早く知らしめたいからである。)

一、右の件に關するお問ひ合はせは返信封封入のこと。
昭和十三年二月
川柳人協會
贈呈者御署名
三井 橋本 緑 雨君(大阪)
十口 福田 山雨 樓君(横濱)
十口 森 井 荷 十君(東京)
二口 弘 津 慶 一君(朝鮮)
十口 藤 生 路 郎君(大阪)
計 三十五口

眼病 夕鐘選

眼を病みてラッシュアワーにあらわて
眼帯へ箸の充なる豆が逃げ
眼を病んだ子には甘い母さなり
眼帯に當座方角取りちがへ
眼病に眼病廻り道をする
眼病含まじなひに來る客があり
眠を病んで居る間に木の芽高く伸び
眼帯をすればなんや寄つてくる
眼を病んで子供を叱るこも多し
醫藥は別に一畑信じきり
眼病へつい親心おちつかず



氏夫武城高・士博青一本川・粹主郎路生藤・氏魚東森りよてつ向席客列前

が君の作風である。いかにも、ものしづかである。性格をそのまゝ反映させてゐてうれし
い。君は姓を正本(まごもと)、名を佳雄(よし
を)と云ふ。明治四十年八月廿三日大阪に生
れた。勤務先は大坂鐵道局運輸部庶務課であ
る。川柳以外の趣味としては旅行、登山、ハ
イキング、映畫、漫才、浪曲、角力、野球等
々々、頗る多趣味である。川柳雜誌社不朽
洞會員、川維大鐵局支部柳社同人、川維岡
町支部同人、川柳人協會正會員。

眼の悪い母ミラヂオを聞いてゐる 秋子
眼科索きちんミ雑誌積んであり 補美
眼が悪いので色眼鏡曇つてゐる 葉光
眼帯のまま太陽を暖かみ 同
樂隊へ眼病の子も窓へ立ち 美知夫
眼病の子へ母がつき姉がつき 同
眼帯が目立つて街は春の風 斗風
陽だまりで眼のわるい子の動かない 同
眼を病んでつくつく悟る獨り者 松太樓

ホーサンがちち熱すぎる眼の病 同
眼薬を透して春の陽が眩し 由布
眼病へ銚子さびしい日をつづけ 同
眼を手術した其日から日記白 文庫
眼病を見舞ひ新聞讀まされる 同
眼帯をはづして寫眞の中へ来る 美津枝
眼薬をさして小鳥の聲へくる 同
眼を病んで居るこは哀れ戀敵 南濃路
眼病の又吐られる新刊書 同
眼病へ處女の眞心ふれてくる 同
(五)眼病は青葉の陽ざしへすねて立ち 南濃路
(五)眼病に男らしさがくづれかけ 葉光
(五)爆音へ眼病まぶいだけの顔 美知夫
(五)眼帯をはづせば痛い窓さなり 風葉
(五)病院で呼ばれるまでの眼を押へ 春月
(人)病める眼に今日大勝の旗の波 良矩
(地)慰めてやれば眼病膝を撫で 謙南坊
(天)足袋をはけとソコヒの母はわからし 尺琴

川維 天體川柳の夕

プラネタリウムを中心に

三月二十三日の午後五時半から、
市立電氣科學館で我社主催の天體川
柳會が開催された。生憎雨天にも拘
はず、定刻には殆んど四十名を數
へた。先づ六階の天象館で東洋唯一
のプラネタリウムを見學、なるほど
こゝへ眼むりに来る人があるようだ
が、忙しい大阪人の考へそうなこと
だと思つた。科學館天文部の高城武
夫氏が懇切な解説によつて大宇宙の
美に陶醉し、上掲の記念撮影。次い
で五階讀書室に席を移し斯界の權威
山本一清博士の名講演ならびに高城
武夫氏の「天體を語る」の講演を拜
聴。高城氏は(一)星の美。(二)黃道
十二星座(三)一等星の名稱。
(四)星座の日本名等の資料を贈寫刷
して配付されるなど、感謝の外はな
かつた。講演後、席題「望遠鏡」默平
選、「虹」かはる選の二題を課し作句

志賀志那人氏を悼む

大阪市社會部長志賀志那人氏が四月八日午

後六時五十分に永眠された。享年四十七。氏は熊本
縣出身、大正五年東大文學部哲學科を卒業、同八年
嘱託として大阪に入り、九年主事に補せられ北市民
館長となり社會事業につくすこと多年、昭和十一年
五月社會部長に昇進今日に及んだ。
本社麻生路郎主幹との交友は君が北市民館となつ
た頃からである。一昨年の歳末に今宮の無料宿泊所
で川柳會を催した時にも君は臨席されて、彼等の名
吟?に微笑まれてゐたが、前途有爲の身で惜しく
も幽明境を異にされた。謹んで悼む。

片瀬醫學博士

「安産のために」冊子呈上

あ産
のた
めに

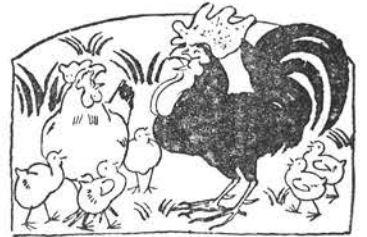
妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

梅林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査



マダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店



各地柳壇

規清稿投

一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
二、文字を正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

川柳會 (大阪)

出 席 者 名 (順不同)

路郎、夕鐘、美知夫、守男、村句茂、斗風
治水、一波、くもを、栗、尺琴、默平、芳醉
雪春、楠美、形水、亞鈍、仁、落葉、正知
潮花、謙南坊、光喜、幸葉、水坊、紫香、
愁花、寄與史、無煙、松太樓、東魚、四郎
かほる、香水、智美、アート、霞乃

兼題「太陽」 麻生路郎選

先約の二階朝から日が當り
日蝕へ僕も僕もの聲を聞き
黒點を話す博士の若すぎる
日蝕に観測陣ははりきつて
わたしの太陽などと書いて来る
全快に近い疊へ陽が入り
太陽へまともに飛んだ本疊打
太陽に感謝がしたい療養所
日の丸と太陽の畫は子がうまい
(人)太陽が好きで八巻しめて出る
(地)嵐のような太陽の出る島に病
(天)太陽へ乳屋車のふたを開け
兼題「一月」 森 東魚選

トトラックが街道一の月をあび
月夜とは知らず約束してしま
哨兵の交代惜しい月があり
ひるの月みて忙しきは四十過ぎ

斗風 守男 無煙 くもを

宿直へだまされさうな窓の月
皇軍の夜襲が迫る月が落ち
わけのある二人は月を背に行き
防空に心齊 橋は月あかり
醉さめの水に静かな月をみる
いゝ月夜散歩のやうに巡查行き
死に行く男女へ月がつきまとひ
上段と下段に寓すだまの月
どの月も漫畫で見れば笑つて居
馳けるく月に心をのぞかれた

兼題「雷」 互選

雷へ祖母さんむかしの話なぞ
商談が成り遠雷を聞いてゐる
大きおましたなと傘をすぼめて来
雷へ風鈴はげしく鳴りつづけ
雷へしばし停電する夜學
雷がやんだところで膝へ来る
停電にさせて雷鳴り終り
雷は雷でよし俺はのむ
雷がこわい電車の人となり
雷もにげて夕日へ鳥が鳴き
雷へしばらく消へる夜業の灯
お父さんの歸りがおそい稲光
雷へそれからまづい酒となり
兼題「望遠鏡」 石井默平選

望遠鏡隣の客に借りられる
望遠鏡關所のあつたこと知り
松太樓 かほる

望遠鏡月に五錢の札を書き
望遠鏡今来た山をながめて見
望遠鏡未だ未だ見える星の數
望遠鏡目的の星見當らず
望遠鏡あつたら羽左衛門の皺
望遠鏡星の世界の面白さ
望遠鏡宇宙の外をたづねられ
光榮の望遠鏡にちかひ立て
席題「虹」 高橋かほる選

山峽へ虹がかゝつた汽車の窓
お針子の歸りへ虹が美しい
行水へ虹を見付けた子が戻り
先生が虹を指さす田舎道
横むいて聲がかゝつた汽車の虹
大阪はビルからビルへ虹がうき
虹の橋どつちが北か南だか
暫くは虹を見付けた子等のもめ
打ち明けた戀にきれいな虹の橋

梅田支部句會 (大阪)

二月八日 於西宮共濟會館 水谷鮎美報
人生、梅、五百圓、マツチ、銅像

北風が梅見の頬をなでゝ行く
結局は我子の爲に生きる世か
五百圓たんだで見ればつまらなし
人生の苦樂に酒があつてくれ
貴婦人の首に巻かれた五百圓
ポケットのマツチが重い梯子酒
開店のマツチ別れた娘の名前
銅像の影をこはした春の水
銅像の蔭が涼しい子守唄
遺骨いま梅咲く村へ歸るなり
馬車の鈴鳴つて梅林通りすぎ
戀人と来て月ヶ瀬は霞する
袂から妻に氣拙いマツチが出
もう一度男になれと五百圓
老梅の由緒を秘めて枯れかゝり

陽は西に人間性を失なはむ
一合の酒をわすれぬ四十過ぎ
妓の黒髪を聞いてはマツチの火
愛人とマツチをすれば消へかゝり
桐一葉銅像へおち土へ落ち
遺訓十年銅像の除幕式
念佛の母の掌にある五百圓
言ひ分があり突返す五百圓
五百圓子や妻に見せ母に見せ
二月二十二日 於ホープ茶寮
ろくざん洞報

鴈治郎追慕劇句會

きさらぎ九日 於歌舞伎座
如月面影帳

おもかげの治兵衛は光あびてゐる
四つイ菱遺子ら泪に舞ふてゐる
四つイ菱靜かに幕に拍手する
大向ふ大成駒家の聲を眞似
知盛の靈よおほきく波に消ゆ
辨慶の珠數有難き人の呼吸
三月十一日 於、りぶとん喫茶店にて
苦 笑 酒井斗風報

今治支部句會 (今治)

風、慰問文、聲明、風邪
戰勝を風大空で告げてゐる
繪の風は鐵兜ある時代相
文庫

阪大川柳會
(大阪)

丸島利生報

岡町支部會 (大阪)

割れで日本の姿寫される

矢子



柳界 展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一
舉手一投足を此展望欄ですぐわか
る様にしたい皆様の御通信を歓迎
する。(係)

催

- ▼川柳雜誌社主催の天體川柳會は三
月二十三日午後五時半から市立電氣
科學館天象館を見學、記念撮影の後
五階讀書室で開催され天文學界の權
威山本一清博士の講演に續いて科學
館天文部の高城武夫氏が文學的資料
の謄寫を配布して講演され、後、天
體に關する句作に耽つた。
- ▼松坂俱樂部趣味道場の路郎川柳講
座は四月三日と十七日に開講した。
- ▼路郎主幹出席。
- ▼有恒俱樂部有恒川柳會では四月十
二日開催された。路郎主幹出席。
- ▼川維・廣島支部三月例會は二十五
日廣鐵俱樂部で開かれた。
- ▼御所軍川柳社は創立三周年記念川
柳大會を四月三日京都民政會館で開
催された。
- ▼昭和川柳四月例會は六日六時半か
らをぐらやビル四階ホールで開かれ
た。
- ▼川維・竹原支部は久し振りで春季
川柳大會を四月十日松井可笑君宅で
開いた。

▼尼崎句會は四月十日夕刻から尼崎
衛生組合事務所で開かれた。路郎主
幹出席。

▲柳友會では柳友會五周年記念誌上
句會第一回の句を募集してゐる「合
意」「傲慢」「ゴザ」「豪飲」「吳服」
各題五句限り五回分入料金五拾錢
投句先東京市蒲田區女塚二丁目二二
ノ一柳友會事務所

▼靜岡川柳會では靜岡川柳百號を記
念する事業の一つとして久良俊翁半
折頒布會を企て、なほ又同誌上では
百號記念誌上句會を發表してゐる。

▼「みちのく」二十周年記念全國川柳
大會は八月黒石で開催する筈。

▼柳友會四月例會は十日午後六時よ
り京橋豊玉河岸朝日俱樂部で開催。

▼京濱川柳吟社聯盟の大谷五花村氏
歡送茶話會は四月四日午後六時銀座
國民新聞社會議室で開かれた。

▼岡町支部は四月二十九日路郎主幹
と霞乃女史を招いて箕面吟行を催す
由。

▼第四回全國川柳家交驛大會を記念
すべく愛知、岐阜川柳聯合會の名
の下に毎年一回同會が名古屋市中で開
かれる事になった。

創刊・合併・復活

▼池田可寄君(仁川)等の高麗川柳
社では四月一日高麗創刊號を刊行し
た。發展を祈る。

▼阿部佐保蘭君(東京)のS・H・K
はきやりと合併、六月號からS・H
Kの記事が約十頁にわたつて掲載さ
れること。

▼河野夜王君(大阪)は柳誌編輯を復
活その四月號を出した。

消 息

▲森雞牛子君(大阪)は胃擴張で藥餌
に親しみながらも「三味線草」のた
め苦闘されてゐる。

▼須崎豆秋君(不朽洞會員)から「今
(三月廿九日午前十一時)九天さんに
大阪鐵道局前で逢ひました今日は時
間が無いのですぐ歸ります。先生や
皆さんへよろしくと言つて居られま
した」云々の通知に接した。

▼石崎柳石君(今治)は三月廿九日、
學校の休暇を利用して廣島へ墓參に
歸られた由。

▼生田翠夢君(大阪)は三月二十日附
東都柳人達の寄せ書きを寄せられた
▼福田山雨樓君(不朽洞會員)はまた
眼を悪くされ通院されてゐる。

▼正木琴舟君(青島)は暫く大阪に滞
在してゐられたが再び明朗化した青
島へ歸られた。

▼多田市他樓君(下關)は誌上での柳
友櫻川不水君(下關)と三月十六日
關鐵俱樂部に於て初めて對面、胸襟
を開いて、快談された。流星、九呂
平、半休、哲志、金志醒、周二、柳
星、長門の柳友諸君等と寄せ書きを
寄せられた。

▼菊川泰平樂君(滿洲)は渡滿されて
から足掛け四年になる由、東邊鐵
道の材料輸送に寧日ない活動を續け
てゐられる。

▼橋本緑雨君(不朽洞會員)は三月二
十六日福田鶴峯君と第一回皇陵巡拜
をされ、深草雀のお宿の繪葉書を寄
せられた。

▼安川久留美君(金澤)は四月六日來
阪、川維事務所を訪ねられた。

▼鳥生古佛君(今治)が四月六日來阪

川維事務所を訪ねられた。

▼山西省忻口鎮附近南懷化の戰闘で
名譽の戦死を遂げられた澄田羅門君
は嘗て川維廣川支部同人として活躍
されてゐたので故人の靈前にささげ
忠魂を慰めるため嚴父澄田唯右衛門
親戚尾添雷相、友人尼絲之助君等連
名で柳人諸君の追悼句を蒐集中であ
る。追て追悼句は羅門君の句集刊行
の際合併して故人の舊交を偲ぶ記念
品とされる由。

慶 弔

▼加藤ライト君(不朽洞會員)は三月
二十四日芳一君を擧げられた。

▼田邊由布君(兵庫縣)の母堂は昨年
の夏以來病床に居られたが三月九日
午後〇時二十五分七十才の高齡を以
て永眠された。謹んで御冥福を祈
る。

▼川維竹原支部の小田蛙庵君(廣島
縣)の嚴父は三月二十五日逝去され
た。哀悼の意を表す。

轉 居

▼明石柳次君は京都市西日暮通竹屋
町上ルへ。▼小川京詩君は東淀川區
三津屋北通三丁目二八へ。▼龜井晟
修君は函館市青柳町參拾七番地へ。

▼坂井久良俊君は千葉縣市川市新田
百〇五へ。▼林世香君は名古屋市中
村區牧野町池田五五鶴岡方へ。

改 號

▼末政寒閑坊君は掬水▼川村親月君
は春月

★ 社 告

▼金田並木君を川柳雜誌社不朽洞會
員に推薦した。

川 雜 ・ 案 内

六號活字十四字三行
金五十錢(但し前金
切手代用可)柳
柳、廣告、その他

川柳を作る人愛好する人の必讀誌
毎月一日發行 一部廿錢 送料一錢

東京牛込區湯島町八川柳俱樂部社

代表誌 川柳草薙

一部一〇錢(一年一圓(郵税共))
名古屋市中區八熊町寺田
發行所 草薙川柳社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行 一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四
六八 川柳きやり吟社

一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 みちのく
一部十五錢 一年一圓五十錢
青森縣黒石町 川柳みちのく社

三味線草
一部廿錢 一年二圓
大阪此花區西九條二ノ六二
大阪媛柳川柳社

「大正川柳」第五一號及び第五
八號相當の代價にて譲受けたし
川柳雜誌社内 BB生

懸賞川柳
課題「薔薇」五月十日
「百」六月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と
明記の事)選者藤生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先 大阪西成區玉出本通
三ノ三六 藤生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

大阪西成區玉出本通
三ノ三六 藤生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
昭和十三年四月十日印刷
昭和十三年四月十五日發行

川柳雜誌

NO. 171

定價金 30 錢 送料 壹 錢

…心中の物買御と通交 屋島高海南

- | | |
|----------------|-------|
| へ階二ガスらか驛架高波難…… | 車電海南 |
| へ階地ガスらか驛波難…… | 鐵 下 地 |
| へ階一車下前屋島高海南…… | 電 市 |
| へ階一車下前屋島高海南…… | ス バ 南 |
| へ階一車下前屋島高海南…… | ス バ 線 |



海南
高島屋

大
なん
ば 阪

